

発行責任者
外旭川病院ホスピス 嘉藤 茂
〒010-0802
秋田市外旭川字三後田142



TEL 010-868-5511
FAX 018-868-5577
HP [www//jkk-sotohp.or.jp/sotohp/](http://www.jkk-sotohp.or.jp/sotohp/)

緩和と倫理

外旭川病院 看護部長 大山京子

皆様こんにちは 初投稿ですのではじめましてですね

私は、ことし4月からこちら外旭川病院に看護部長としてお世話になっております、大山京子と申します。多くの方と楽しくつながりまた、多くの方からのご指導も頂けたらと願っております。よろしく願いいたします。

簡単な自己紹介をさせて下さい

①生まれは県南の羽後町で重要無形民俗文化財となっております西馬音内盆踊りで有名です。祖霊たちを送る盆の八月十六日。出羽の山並みに日が沈むころ、羽後町西馬音内に寄せ太鼓の囃子が鳴り響きます。やがて、着飾った踊り子たちが、篝火のたかれた本町通りで三日間踊ります。およそ七百年前に始まったとされる西馬音内盆踊りです。囃子方、踊り手、篝火が繰り広げる夢幻の世界と不思議な時間と空間を感じております。

この3日間以外はとても静かな田舎町で、私の大好きな田園風景一色です。



②看護学を学んだのは宮城県です。独立行政法人国立病院機構 宮城病院は東北の湘南と称された山元町にあります。東日本大震災でこの町の日常を粉碎・多くの田畑が水没・港も壊滅状態となったようです。津波により、国道6号線以東で、常磐線の2駅を含め、多くの家屋が流失し、人口1万7千名のうち9百名近い犠牲者がでました。宮城病院は国道6号線に面して西側にあり、津波の難は免れたが、地域唯一の病院でもありました。多くの溺水者、けが人が搬送され、被災した多くの住民が押し寄せたそうです。通信が完全に途絶えた中で、家や家族の安否もわからぬままに、医師始め全職員が不眠不休で対応し医療者としての責務を果たしていたと聞き大変心が痛みました。

医療に対する拘りと私の看護観について述べます

・私の永遠のテーマでもあり看護観を一言で表すとすれば「緩和と倫理」です。

皆で創ったこの理念に向かって患者サービスを築いていきたいと思えます。

すべての対象者に優しく

そして倫理的配慮のできる

自立した看護集団をめざします

また、職員同士“ありがとう”を口癖に“ごめんなさい”を口癖になるような看護集団・・・人として倫理的問題点に気づける倫理的感性が高く倫理的配慮のできる看護集団・・・

私の役割は「全ての対象者の緩和と倫理」の実践者となるための、教育、研究、啓発です。それが人材育成、後継者育成に繋がると思えます。患者さんも職員も大切に共に成長できる明るい集団にしたいです。

皆様からのご支援、ご指導を宜しくお願い致します。



緩和ケア認定看護師に合格しました

岩手県立釜石病院 看護師 西 明子

私は、昨年10月に岩手医科大学附属病院の高度看護研修センター、緩和ケア認定看護師教育課程の研修生として約1か月間実習をさせて頂きました。

そして今年7月、無事に認定看護師になることができましたことを外旭川病院のスタッフの皆様へ報告させていただくとともに、改めて実習でご指導して頂いたことに感謝申し上げます。

私は地域医療を担う病院に勤務していることから、実習先は是非“地域医療に力を入れている病院にしたい”と外旭川病院を希望しました。

しかし、厳しいと噂される実習に一人では知らない土地、知らない病院に行くのは非常に不安な気持ちでした。もう十分に大人でありながら挙動不審な私を病棟スタッフの皆様は初日から歓迎して頂きました。細やかな配慮（私の食事のお世話まで）で本当のスタッフとして仲間のように声を掛けて頂き、とても幸せで楽しく実習を過ごす事ができました。恵まれた環境で緩和ケアを学ぶことができ本当に幸せな時間でした。

緩和ケアならではの患者さんの希望に沿っ

た苦痛を取り除く治療、ケアに悩んだり迷う場面で随時カンファレンスが開かれる看護面からのアプローチ、本当に多くのボランティアさんが毎日患者さんに寄り添っている場面を目の当たりにし、私の地域での緩和ケアも頑張らなくてはと強く思うとともに素敵な病院がある秋田に住む皆様がうらやましく思いました。

緩和ケア認定看護師になり、あの時感じた思いを胸に少しずつ活動しております。当院はまだ緩和ケアに携わるボランティアもいませんし、患者会も存在しない急性期病院ですから、なかなか同じようにはいきませんが一歩ずつ歩み始めたところです。

これからも緩和ケアを勉強させていただく身ですので、外旭川病院さんにはまたお世話になることがあると思います。これからもよろしくお願い致します。

今年も研修生がお世話になると思います。また皆様のお力をお借りして1人でも多く、緩和ケアに携わる人が増えることを願っています。



今年度も「緩和ケア認定看護師教育課程研修生」を受け入れ

今年度も、10月8日～11月6日の間、緩和ケア認定看護師教育過程研修の佐藤美佳子さんが5階階ホスピス病棟において研修中です。佐藤さんの勤務病院は、一般財団法人岩手済生医会中津川病院です。

佐藤さんが十分な研修の成果をあげられるよう、ホスピススタッフ一同で支援し、励ましていきたいと思っております。

（富野看護師）

（左写真は、ホスピススタッフを対象に、佐藤さんが行った演題「怒りのある患者の対応～怒りの背景にある要因を知る～」での発表会です）





親孝行

2階ホスピス病棟看護師 照井 久仁子

10月にはいり急に肌寒くなり、こう寒いと冬も近いなあと感じます。

元々横手出身の私ですが、高校卒業と共に秋田を離れ十数年県外で過ごしてきました。ふとしたきっかけで2年前に秋田に戻ってきた私。平凡ですが家族と過ごす秋田Lifeをご紹介します。

両親は今も横手に住んでおり、休みを利用しては帰省し母とランチ・買い物・ドライブに出かける日々です。県外にいた時は帰省すれば母の故郷の味を楽しみ、自分の英気を養う事が多かったのですが、今は母の気分転換になればとの思いもあり出かける日々です。

少し前ですと自宅の畑でサツマイモやイチゴの収穫を楽しんだりもしました。一方父はまだ現役で仕事をしており、父とのコミュニケーションは夕食時の晩酌がほとん

どです。以前「いつか子供たちと酒を飲むのが楽しみだ」と話しており、これ幸いとばかりに実家に帰れば父と晩酌を楽しむ私。そんな2人を呆れ顔で眺める母。この光景は我が家の当たり前の一コマです。

言葉にすればとても平凡な日々ですが、この年になり再度親と過ごす機会に恵まれ、今後も少しでも「親孝行」続けながら、ホスピス入院中の患者さん、ご家族のお役に立てるよう努力していきたいと思ひます。



目くばり、気くばり、心くばり

5階ホスピス病棟看護師 進藤 美保子

医療に従事させてもらい、今年で40年すぎとなりました。長かったような、あっという間だったような年月です。幸せな経験、失敗した思い出、夜勤明けのだるさや緊張感など、それなりの看護生活でした。

今回初めて、ホスピス病棟で勉強、新しい医療分野に勤務させていただき、毎日が緊張の連続です。

看護師になって、まもない頃に先生に言われた一言です。「あなたたちの目くばりは当たり前、目くばり、気くばり、心くばりが出

来て一流ですよ」と。

毎日の業務に対し、“心くばり”を大事に少しでも患者様の心に添えるよう努力してゆくつもりです。





今が一番幸せ

ホスピスボランティア 工藤 房子

私は、2005年に母をすい臓ガンで亡くしました。当時の私のホスピスのイメージは、暗く、ただ死を待っているイメージしかなく、ホスピスへの転院を選択しませんでした。

母亡き後は、うつ状態になりました。そんなとき、新聞でホスピスボランティア養成講座を見て、自分を変えたいとの思いで申込みました。実際に活動に入り、患者さんと接したり、行事に参加させていただくと、自分のホスピスに対するイメージが崩れていきました。

患者さんは、自分の趣味や特技を活かしながら、充実した毎日を過ごしています。なにより時間が穏やかに過ぎて行きます。

先生や看護師さんは、患者さん一人一人に真摯に向き合っている姿がすばらしく思いました。患者さんからは、数えきれない多くの

事を教えていただきました。ある方は、朝、「お早うございます」とお部屋にお邪魔すると、いつもニコニコ顔で、「お早う」と声をかけて下さり、ある方は、いつも心穏やかにお話をして下さいました。

そんな中で、ひとりの患者さんが自分の生きて来た過去を話して下さいました。「いままで苦労ばかりだったけど、今が一番幸せ」と。その時、私は、自分の命の限りを知りながら「今が一番幸せ」と言える人のすばらしさ、自分もそう言える日が多くあるように「今が一番幸せ」を大事にしています。



私の散歩道

ホスピスボランティア 渡辺 豊子

自身の生活を改めて見つめ直した時、何かに挑戦したいという気持ちが芽生えました。

何をすべきか模索する日々の中、ホスピスボランティアにたどり着きました。

不安をもちながらの出発でしたが、スタッフの皆様と先輩の優しさに支えられ、すぐに安心して活動する事が出来ました。中でも患者さんから教わる事が多く、沢山の思い出も頂きながら日々感謝の気持ちをもって活動に臨んでいます。

患者さんとの散歩の途中に雨になり、1本の傘で「雨のおかげ」と、その患者さんと楽しく一緒に帰った日の事を時々思い出します。

患者さんに失礼がないように対応を心がけていたはずなのに、話がはずみ、ついつい「OK」と気楽に返事をしてしまい「ごめんなさい」と謝る私に、患者さんから「新鮮でうれしいわー」との声、その優しい患者さんの言葉に心がすくわれた日もあります。

報告書を書く時、漢字をかなり忘れていた自分に気付かされました。これを機会に漢字の勉強を始めようと思い、漢字検定に挑戦してみました。孫ほどの年のはなれた子供たちに混じっての受験は緊張するものの楽しく新鮮な経験でした。無事合格し、人生において初めてかもしれない合格証を手にした喜びを味わえたのもホスピスボランティアと出会えたおかげと感謝しております。

なにげない日々のなかにも心温まる瞬間が数多くあり、人と人とのつながりの素晴らしさに幸せを感じております。

この活動に出会えた事に感謝しながら病院までの徒歩30分の道のりが充実した私の散歩道になりました。





ホスピス勉強会（9コマ）の開催

2階ホスピス看護師長 高橋加代子

26年度も、5月15日～8月28日の間に、恒例のホスピス勉強会を開催いたしました。目的は、①ホスピス・緩和ケアにおける症状コントロール、家族ケア、鎮静などの知識と技術の習得、②知識・技術の向上を図り、ケアにつなげる、③関連施設スタッフ・院内における多職種との交流の場、で、研修内容（9コマ）及び講師は、開催の順に

- ①緩和ケアにおける看護師の役割・・・看護師長 高橋加代子
- ②終末期の症状経過・・・医師 松尾直樹
- ③疼痛マネジメント・・・医師 松尾直樹
- ④消化器症状のコントロール・・・医師 松尾直樹
- ⑤呼吸器症状のコントロール・・・医師 松尾直樹
- ⑥精神症状のコントロール・せん妄・・・医師 松尾直樹
- ⑦その時どう対応する～コミュニケーションの工夫～・・・医師 嘉藤 茂
- ⑧MSWのかかわり・ホスピスボランティアの役割・・・MSW 伊東 威、VC 寺永守男
- ⑨鎮静に関する倫理的配慮・・・医師 松尾直樹 でした。

研修の対象は、ホスピス病棟の看護職員、介護職員に加え、院内の多職種スタッフ、グループ内施設（看護師・介護福祉士）、在宅部門スタッフ（訪問看護師）、相談員とし、開催を案内しました。

時間帯は、勤務時間外の17:15～18:15にかかわらず、毎回30名前後の参加があり、なかでも参加者のうち約三分の一がホスピス病棟外からの方で、大盛況の勉強会となりました。

全体のアンケート調査では（現在集計中）、「研修の内容がわかりやすかった」と「研修内容に関心・興味が持てた」と答えた方が約7割、「研修内容は現場で遭遇する問題の解決につながる」という方は、5割を超えました。

また、「初心者ですがわかりやすかった」「現場で生かしていきます」「普段の仕事に大変役立つと思う」等の意見も記載され、大変有意義な勉強会になったと思います。

なお、この期間に都合が悪く参加できなかった方のために、9月4日からビデ研修を実施していますが、毎回10名程度の参加があります。10月30日にすべての当該勉強会を終了いたします。

この成果をふまえ、27年度も同種勉強会を開催する予定ですので、グループ内の皆様の参加をお待ちしています。



勉強会会場の4階研修室で熱心に講座を傾向する参加者の皆さん



病棟内デス・カンファレンスにボランティアが初参加

ボランティアコーディネーター 寺永守男

ホスピス病棟では、チーム活動を効果的に促進するため、様々なカンファレンスが行われていますが、ボランティアが直接参加することはありません。（ボランティアコーディネーターは参加）

この度、5階ホスピスで亡くなられたある患者さんを振り返る「デス（Death）・カンファレンス」が計画される中、ボランティアがこの患者さんに深く関わったこともあり、当カンファレンスにボランティアの参加についての打診がありました。ボランティア間の公平性や患者さんのプライバシー等の懸念もありましたが、特に関わりの深かったボランティアの参加と遺族に了承をいただくことで参加させていただくことになりました。

8月20日、「病棟スタッフとボランティアの合同カンファレンス」として開催され、ボランティア5名が参加し、担当看護師の入院時の経過説明と数名のスタッフの発言の後、5人のボランティア全員に発言の機会を与えていただきました。

参加したボランティアは、多少緊張気味ながら、「その患者さんとどのような関わり方をしたか」「患者さんがどんな様子で、どんな話をされたか」「そのときどんな感想だったか」「患者さんから何を学んだか」等、具体的に話してくれました。ボランティアの発言を受け、スタッフ側から「ボランティアの存在の重要性を再認識した」という主旨の発言が数名からあり、参加したボランティアも強い満足感を持ったようです。

後に行われた、ボランティアを含む参加者全員に対して行われた当カンファレンスに対する調査結果を見ると、スタッフ側からは「ボランティア活動の重要性を再認識したという思い」、ボランティア側からは「スタッフの方々が真摯に患者さんに向き合っていることに感動したという思い」が生じ、お互いチームとして活動する上で、強い絆が生まれたと思います。

この成果を踏まえ、今後、開催時期、時間帯等の課題をクリアして、同種カンファレンスにボランティアを参加させていただければ幸いです。なお、調査結果（単純集計）は、ボランティア全員に閲覧して、この結果を共有して活動に反映しつつあります。



病棟スタッフとボランティアの合同デス・カファレンスの様子

編集後記

ホスピスでは研修や見学を積極的に受け入れています。本号の西さんのように、緩和ケア認定看護師の専門的な研修や、秋田県内のみならず、東北各県の緩和ケア従事者など、医療者の研修が主です。さらに、医学生や看護学生など、医療の将来を担う人たちも来てくれます。実のところ、研修を受け入れる私たちも緊張します。誰に見られてもはずかしくない医療やケアがきちんとできているかが問われるからです。ですから、この緊張は私たちの成長促進剤です。研修生も私たちも研修によって育っていく。そんなホスピスであり続けたいと願っています。

(S. K)